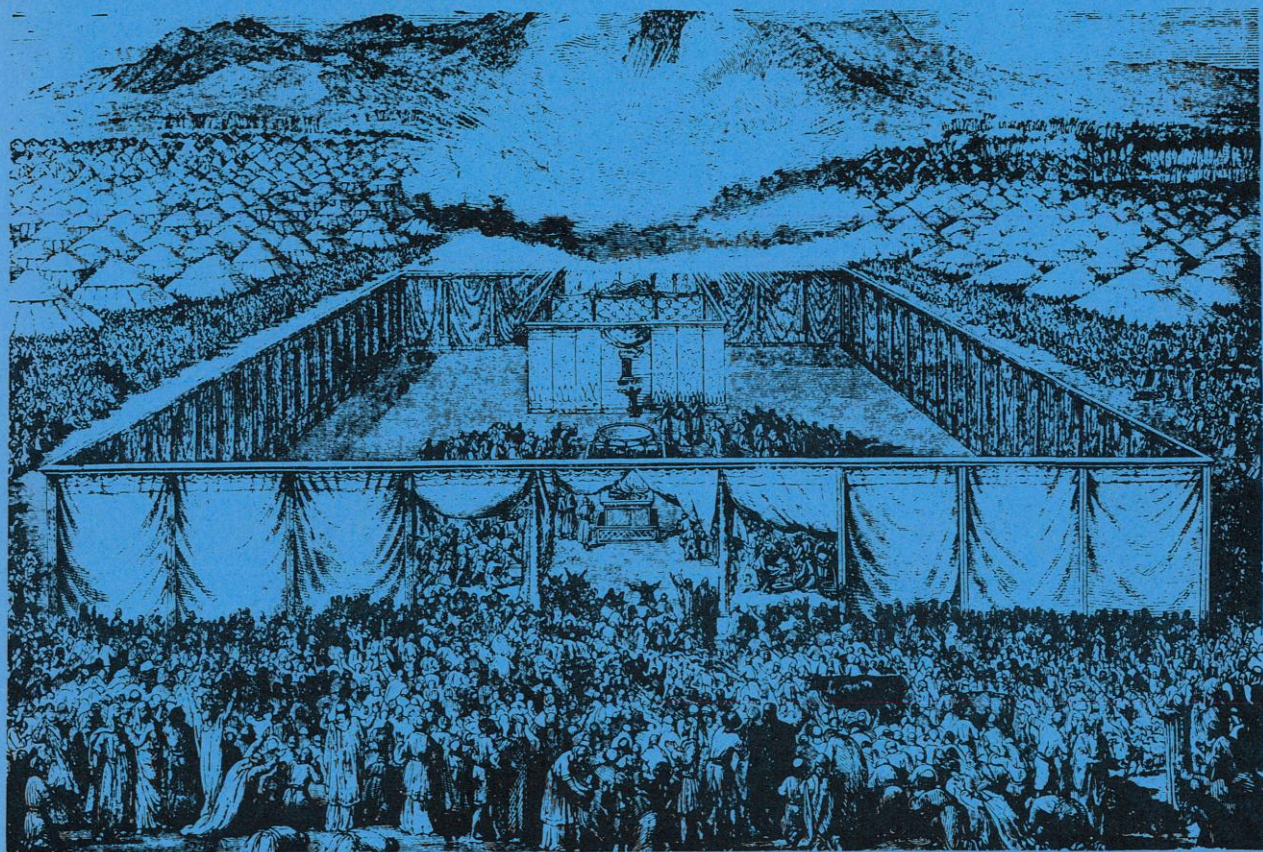




アンカー Anchor



『神よ、あなたの道は聖所にあり。』詩77:13 (英)
『われわれは今、大いなる贖罪の日に生存しているのである。』
大争闘下 224

第3号

★ 目次 ★

アンカーの目的	1
略号の説明	2
1888年 — 勝利か敗北か？	3
信仰から学ぶ教訓	9
アンカー堅固な土台	12
人の能力と才能	20
完全な品性に関する質問と反対	24
皆様に研究して頂きたい宿題	28
読者からの声	30
広告	32
編集後記	33



◆アンカーの目的◆

アドベンチストの中に三つの大きな曲解がある。

1. 三天使の使命の曲解
2. ダニエル書 8 : 14 の聖所の清めについての曲解
3. 預言の霊についての曲解

我々は次の事を信じてアンカーを出版している。

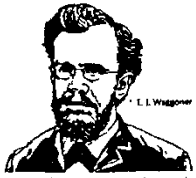
1. 我々 S D A の働きと使命は三天使のメッセージである。(6T p.384, 2SM p.142)
 第三天使の使命が再臨の栄光の前に立ち得る特別な備えをさせるものである。
 (9T p.98, GC II p.140)
2. 第三天使の使命は人々の心を至聖所に向ける。そこにおいて信者は最後の特別な贖いを受ける。
 (EW p.414, 5, 7)
3. 我々は神のもくろまれたこの特別な祝福、特別な体験を拒み続けてきた。特に
 1888年以来。
 (RH 8/26, 1890)
4. ダニエル書 8 : 14 — 聖所の解明に御業の完成はかかっている。
5. エレン・G・ホワイトは聖書の預言者と同様の靈感が与えられた預言者である。
6. 最後の時代の嵐に押し流されないようにさせるアンカー(錨)は三重の天使の使命、聖所、安息日、人の性質、イエスの証(預言の霊)等である。
 (EW p.417, 1T p.300)
7. アンカーにはリレーの最終走者の意味がある。この世代は福音の働きが信者の内に、外の世界に完成する最後の時代と信じる。不信仰によって、140年も時は延ばされ、イエスの十字架の苦しみを増している。(GC II p.182, Ed p.328)
 信仰の義認の体験によって、再臨を早めることをキリストは待っておられる。再臨と御業の完成をこれほど遅らせているのが我々神の民であるとするならば、我々の今日の義務は何なのか、約束のものを受ける条件は何なのかを研究し、共に備えたいと思う。

証の書の略号の説明

略号	説明
AA	患難から栄光へ
AH	アドベンチストホーム
1-7BC	バイブルコメンタリー一巻～七巻
CD	食事と食物の勧告
CG	家庭の教育
CH	健康についての勧告
ChS	クリスチャンの奉仕
CM	文書伝道者
COL	キリストの実物教訓
CSW	安息日学校の勧告
CT	両親、教師、生徒への勧告
DA	各時代の希望
Ed	教育
Ev	伝道
EW	初代文集
FE	クリスチャン教育の基礎
GC	各時代の大争闘
GW	福音宣伝者
LS	ホワイト夫人の自叙伝
MB	祝福の山
MH	ミニストリーオブヒーリング
MM	医療奉仕
MYP	青年への使命
PK	国と指導者
PP	人類のあけぼの
SC	キリストへの道
SD	神の息子、娘たち
1-4 SG	霊の賜物1～4巻
SL	清められた生活
1-3 SM	セレクトッドメッセージ1～3巻
SR	生き残る人々
1-9 T	教会へのあかし1～9巻
Te	節制
TM	牧師と働き人への勧告
RH	レビューアンドヘラルド
ST	サインズオブザタイムズ
MS	原稿
Letters	手紙
YI	青年のてびき

キリストを仰ぎ見るといふことは、みことばに与えられた主のご生涯を研究する事を意味している。・・・仰ぎ見ることによって我々は変えられる。品性において完全であられたお方に道徳的に同化するのである。彼の着せられた義を受けることにより、聖霊の改変の力を通して、我々は彼のようになるのである。 S. H. H. H.

キリストを仰ぎ見るといふことは、



1888年—勝利か、敗北か？

以後、教会は発展か、巨大な背教か？



白熱化する1888年の問題

今年の祈禱週の読み物は「1888年、メッセージの神髄」であった。ライフ10月号に1888年のメッセージに関する特集があった。「信仰による義」どれが本物か？というセクイヤ牧師の記事もプリントになって信徒に手渡されている。今年の牧羊秋季号もその特集である。ショート「三天使、1888年、そして今日」の翻訳記事もつい最近出た。アメリカでは今年1988年は、百周年記念として、あちらこちらで行事がなされたようである。日本にもアメリカから「1888年研究会」の記事が英文である方々には配られている。これはうれしいことである。再び1888年のエピソード「信仰による義認」の問題が白熱化している。我々日本人はまたもや「まあまあ式のなれあい」で好機を逸するのだろうか？

最近の新聞に米カルフォルニア州立大の経済学博士、伊志峰氏の貿易についての記事が載っていた。「もともと日本人には、異なる意見を、感情論でなく、理ずめでとことん論じお互いの論点を明確にした上で妥協点を見出すという手法は苦手のようなのである。初めからまあまあ式のなれあいである」と。(1) これは日本人ばかりではなく、S. D. Aの大半はアメリカでも同じだと思う。

ライフの読者は我が教会に、今日、二つの相対立する意見があることに気づかれると思う。しかし「世界総会の主要な指導者たちはもう一つの声を受け入れない」姿勢である。公式の教会誌で、学者達がそういうと「ああ、そうなのか。もう一つの間違った声が指導者を煩わせているのか」と大半の人は考えないだろうか。それがいつの時代にも人々の思考パターンだから。「神学的な論争を事細かに調べたりすることはしないで」という姿勢である。「神学的相違はわきへよけて、眼をイエスに集中させよう」ということである。

しかし、1973年の世界総会年次総会で採決されたアピールは「主の再臨を早めることができるように、個人としても、団体としても、その優先順位を改めねばならない」ことを認め、「アドベンチスト運動の第一の優先事は、組織的なものではなくて、霊的なもの、神学的なものでなければならない。... 教会の使命は正しい神学にかかっている」と謳った。もちろん単なる論争のための論争であってはならない。それはバリサイ人の得手とするところであった。ホワイト夫人はこんな事も言っておられる。「神の民の間に論争も、かく乱もないという事実は彼らが健全な教理をかたく握っているという決定的な証拠だと見なすべきではない。そこには彼らが真理と誤謬とを明らかに識別していないのではない

かと懸念される理由がある」(2) 「宗教的危機における無関心と中立は、神から嘆かわしい罪と見なされ、神に対する最も悪い敵意に等しいものである」(3) こと真理に関しては謙遜と真面目さをもって熱心に追求したいものである。

この問題は重要か？

主はこう言われる、「あなたがたはわかれ道に立って、よく見、いにしえの道につき、良い道がどれかを尋ねて、その道に歩み、そしてあなたがたの魂のために、安息を得よ」と。エレミヤ6：16

我が民の中に教会はどこかおかしいと思っている真面目な人々は少なくはない。その原因、解決が見出せないで魂に安息を得ないでいる。兄弟姉妹方。我々S. D. Aの分かれ道、いにしえの道、過去の歴史をふりかえってどこで道がそれてしまったかをよく見ることである。尋ねる事、研究する事である。神はそれを望んでおられる。(4) また、古代イスラエルとの「著しい類似点」を見ることである。(5) 「大争闘の歴史もまた、神の不変の愛の実証である」(6)から聖書、証の書、自然と同様、神の慈愛に触れることができる。神のS. D. A、残りの民に対する慈愛に触れるときに、魂の安息を得ることができる。「神の書から教訓を読み取ろうとしない者は、諸国の歴史の中にそれを読み取るように命じられている」(7)

教会歴史はなおさらである。再臨信徒は再臨の遅延そのものに神の驚くべき忍耐と慈愛を見て、悔い改めに導かれるであろう。

1888年に一体何が起きたのか？ ホワイト夫人が「人間の唇から聞いたことのない」「最も尊い」後の雨をもたらし、大いなる叫びをもたらずはすであったと言われたその使命は何であったのか？ それを知ることは「第一に優先すべきこと」ではないだろうか？ そして1888年以後、教会はどこに向かっているのか？ 発展、繁栄か、それとも「巨大な背教か」を知ることは極めて重要だと思う。なぜなら、それがラオデキアを真の悔い改めに導くか、否かを決定する一大事だからである。

教会の勝利説

私は、20年前に、ウィランド、ショートの「1888年再吟味」を手にした。それはラオデキアの私の目を大きく開いてくれた。それはキリストの義を慕う心を強烈にした。ウィランド、ショートは、1888年の研究の大家である。1950年から世界総会に訴えつづけ、ついにその論文は信徒の手に入るようになった。読む人を覚醒せずにはおかない読み物である。今や彼らは次々に教団の、承認されて出される公式の書物に「我々の教会は1888年のメッセージを拒んではいけない」と発表されることに対して、声とペンで、預言者的

祭司的な叫びをしている。

教会の「非拒絶説」に関しては赤城山学園で出された資料を読んで頂きたい。今年の祈禱週の見聞録、64頁に「ある程度の誤解と対立があったにもかかわらず、1888年の経験は多くの点で勝利と言えるものでした」とある。ライフ10月号12頁に信仰による義という教えは1890年代に「根づくように」なったとある。1888年の世界総会は成功、勝利であったとの説をくつがえす神の僕の言述が山積しているとウィーランド、ショートは言う。「The Mystery of 1888」（1888年の神秘）にショートはどのように、教会の代表的な学者達が「見える」と言い張っているかをドキュメントしている。ピース、クリスチャン、スボルディング、プランソン、オルソン、フルーム、そしてホワイト著書刊行協会、そしてアーサー・ホワイトでさえも！この1888年のエピソードの覆い隠しに陰謀があるのか！とショートは問う。(8) 教会側が使用するホワイト夫人の引用文は、自分達の言い分を擁護するために、どんなに歪められて用いられているかを披露している。

その一つを挙げてみる：

E・G・ホワイトの手紙40、1893の「神の恵みによって我々は決定的な勝利を得た」という言葉は前後関係を見ればすぐ分かることなのである。それは、あるキャンプ集会でチーズが大量に仕入れられているのを見て、ケログ博士は、それを全部買いとってそのようなものは我々のキャンプで出されるべきでないということで、チーズの問題で3年間論争が続き、ついにその問題に関して我々は決定的な勝利を得たと言っているのであった。そしてこれは決して信仰による義認の問題ではなかったのである。(9) ホワイト夫人は「ミネアポリスの世界総会での恐るべき経験は、現代の真理を信じる者の歴史の中で最も悲しい会議の一つであることが示された」と言っておられる。(10) そしてこのメッセージが教会に受け入れられたどころか「ミネアポリス以後、教会にかつてないほどのラオデキア状態を見てきた」と言われた。(11)

その総会后ホワイト夫人が強制的にオーストラリアに送られたのはなぜであったか？ショートは説明を続けて何と訴えるか。耳を傾けよう：

「我々は指導者達についての神の評価を見るにつけ、魂を悩まして現代イスラエルのために泣こうではないか！... 拒絶の大罪を悟るまでは悔い改める方法はない」

次のようなホワイト夫人の言葉を引用している：

「しかし、全宇宙は聖霊によってあらわされたイエス・キリストへの恥ずべき取り扱いを証言した。キリストが彼らの前におられたなら、彼らはユダヤ人がキリストを扱ったのと同じようなやり方で彼を扱ったことであろう」(12)

続けてショートの言葉：

「もし我々が我々の歴史の中においてキリストを拒絶し、拒否した罪を見るようになるならば、ギレアデの芳香は、我々の上にくだり、三天使の使命は、神の望まれるとおりに前

進するであろう。なぜ、それは起こっていないのか？ 我々は我々の恐ろしい罪に気づいていない。我々の背教の巨大さは、主によって我々に宣告されている」

「教会内の一千の部門も、それを指揮する一万人の指導者も、第三天使のメッセージが違った色で覆われ、抹殺されているうちは、成し遂げるべき必要のある働きを決して完成しないであろう。アドベンチストが『わたしがその声に聞きしたがわなければならない主とはいったい何ものか』と言うなどとは、全く信じられないことである。今日、我々の間にさまざまな見解の大合唱が起きている。ありとあらゆる悪の力が我々のただ中で働いているように思われる。しかし我々は、このことが起こるであろうと何年も前にすでに警告されていたのである。これは光を拒絶したことの当然の結果である。アドベンチストは、標識となるものを取り外し、信仰の柱を崩し落とそうと試みる時代に直面するであろうと告げられた。事実、奇妙な事柄が教会誌、我々の教役者のための雑誌、青年達のための出版物に出現する時代に到達した。1903年にさかのぼって、これらのことが民としての我々に臨むであろうと勧告されていた。いわゆる改革なるものが我々の信仰の基礎である教理を捨てることにより成立しようとする時代を我々は見ている。残りの教会に与えられた真理の原則が破棄され、我々の宗教が変えられ、そして知的な哲学がそれにとってかわる時代、新しい種類の本が書かれる時代、教会指導者達が、美德は悪徳に勝るといふ神を排除した教えをする時代、神なしでは無価値な人間の力に依存する時代、そして、それは素晴らしく見えるかも知れないが、アドベンチストが安息日を造られた神を無視する、軽視する時代が来る。世的な科学と哲学に訓練された頭脳は神の深遠な事柄を洞察することに失敗するであろう。(13)

そして、誰が信じることができただろう！主の使命者が靈感を受けていたのか、それとも盗作家だったのかを推し量るために莫大な金銭と努力を注ぎ込む時代が来ようとは！その間に我々の歴史は記録保管所の中にあって無視あるいは否定され、また忘れられているのである。実際、『三天使の使命そのもの』と密接に同一視された1888年のメッセージは残りの民に託された働きの終了という結果を生んだことであろう――もし、それが神の定められた方針にまかせておれば。それは、毒麦から麦を選び出して印し、天の倉のために束ねるべき第三天使である。

これらの三人の天使は、現代イスラエルがその気づいていない罪を見て知るまでは、彼らの役目を決して完遂できない。『なまぬるさ』は、我々が悔い改め、盲目であった事を認めるまでは、はびこるに違いない。『我々に見える』と言い張る限り、我々の『罪は残る』のである」(14)

今、沖縄で、新石垣空港建設の問題がある。賛否両論が戦わされている。保守派、革新派は奄美大島の空港建設の例をひきあいに、いかに海が汚染されるかを各々の立場から主張している。周辺の海底を調査させた。賛成派の学者の調査発表によると損害はないという。反対派の学者は損害があるという。琉球新報は「真実の一つだが、事実二つも、三つもあ

るのか」と評していた。

我が教会に1888年の問題に関して、同じ証を持ち、資料がありながら、二つの結論が出るというのはどうしてなのか。真実は一つであるはずである。

天からの真理を理解するためには、まずは幼子の如き単純な信仰を持つことである。信仰は知識の鍵である。(15)また、神のみ旨を行おうと思うなら、分かるはずである。(16)人を恐れ、「祭司達を恐れ」たイエスの時代の人々は分からなくなり、混乱した。「ここから真理を求めている者たちは、まちがえる必要はありません。それは道の4つかどに立って、どちらに行こうかと思案しなければならないような不明瞭なものではありません」と言われている。(17)

1888年の出来事に関して、使命について、使命者について誤解、曲解、歪曲はないだろうか。主が許される限りにおいて研究していきたいものである。それは実に我々の信仰のあり方を根底から揺さぶるものとなるはずである。「人間の栄光をちりに伏させる」はずである。それは「サタンを打ち砕く」経験に導くはずである。それは我々が真のイエスから目を離し、人に目を向けて、バール礼拝を行っている姿に気づかせるであろう。それは我々を罪の本質に目ざめさせ、十字架の深い洞察に導くであろう。それはあがないの日に要求されている深い悔い改めに導くであろう。そして最後のテストが来て、生命をかけても主に信頼するほどの魂の安息を与えるであろう。(18) 最後にもう一度、神のみ言葉に耳を傾けよう：

主はこう言われる、「あなたがたはわかれ道に立って、よく見、いにしえの道につき、良い道がどれかを尋ねて、その道に歩み、そしてあなたがたの魂のために、安息を得よ。しかし彼らは答えて、『われわれはその道に歩まない』と言った。わたしはあなたがたの上に見張りびとを立て、『ラッパの音に気をつけよ』と言った。しかし彼らは答えて、『われわれは気をつけることはしない』と言った。 エレミヤ6：16、17

彼らは『われわれに雨を与え、秋の雨と春の雨を時にしたがって降らせ、われわれのために刈り入れの時を定められたわれわれの神、主を恐れよう』とその心のうちに言わないのだ。あなたがたのがは、これらの事をしりぞけ、あなたがたの罪は、良い物があなたがたに来るのをさまたげた。 エレミヤ5：24、25

1888年の問題に関しても、現代の預言者の訴えに対して同じようなエコーが聞こえてこないだろうか？

金城重博

引用箇所：

1. 琉球新報 1988、12-4
2. 5T 707
3. 3T 281
4. アンカー2号 21頁に引用
5. 同
6. 人あ上 2
7. 大上 364
8. The Mystery of 1888 P74
9. 同 115-116
10. 1888、第三天使、そして今日に引用
11. アンカー2号 22頁に引用
12. 1888、第三天使、そして今日 3
13. Special Testimonies Series, No 7, 39, 40
14. 1888、第三天使、そして今日 14頁
15. マタイ11：25、教育16
16. ヨハネ7：17
17. 安息日学校への勧告21
18. エレミヤ30：21、ガカ8：6-

後記：

次々と1888年に関する資料が翻訳されると思いますが、とりあえず次のような資料をぜひ読んで頂きたいと思います。さまざまな意見を読んで一時混乱することがあるでしょう。しかし、混乱するのなら今のうちで、最後のテストが来たときに、あわてたら遅すぎます。雞がふ化する前のものがきは祝福をもたらすでしょう。

1. アドベンチスト・ライフ 1988、10月号
2. 牧羊 1988、秋季号
3. 赤城山学園、春の修養会、1888年の資料
4. 「第三天使、1888年、そして今日」 井深光子訳
改訳はサンライズ出版部・アンカー係に連絡してください。

6. 英文の情報のほしい方は、辻好文兄に連絡してください。

☎ 298-02 千葉県夷隈郡大多喜町久我原石神1090

なぜだろう？ なぜだろう？ なぜだろう？ なぜだろう？なぜだろう？ なぜだろう？？

わたしは諸部会、諸教会に、人間に依存すること、肉を彼らの腕とすることを止めるようお願いしたい。．．． 我が教会が弱いのは教会員が人間の資源を仰ぎ、それを頼みとするからである。 TM 380

信仰から学ぶ教訓 (LESSONS ON FAITH)

A. T. ジョーンズ

砂川 満 訳

信仰なしに神を喜ばせることはできない。その理由はこうである。「すべて信仰によらないことは罪である。」(ローマ14:23)そして、無論罪は神を喜ばせることができない。

レビュー誌1898年10月18日版の最初のページに預言の霊が「信仰をみがく(洗練する)ことの必要性を我々に促している(時の)聖句の意味を知る知識は我々に要求される他のいかなる知識よりも重要なものである。」と述べているのもこのためである。

という訳で、我々はこれよりレビュー誌のこの場所で毎回信仰の聖書レッスンを学んでいきたいと思う。—信仰とは何なのか、そして、それはどのように起こる(生じる)のか、それをどのように働かせるのか—この誌上の全ての読者が「要求される他のいかなる知識よりも重要な」知識を持つことができるよう願うものである。

R & H Nov. 29, 1898

信仰をみがくことの必要性を我々に促している聖書の意味を知るために、何よりもまず、「信仰とは何か」を知る必要がある。人が信仰とは何かの知的概念を持っていなければ、信仰をみがくことの必要性をその人に促すことは、明らかに目的を見失ってしまうことになる。主がこのことを聖書の中に完全に明らかにされたにも拘らず、信仰とは何なのかを知らない教会員が多いのは悲しい事実である。信仰の定義が何かは知っているかも知れないが、信仰そのものを彼らは知らないのである。彼らは定義の中にある思想を把握していないのである。

そういう訳で、今は定義については触れないことにする。むしろ、ここでは信仰の実例(illustration)を引用し、研究することになるであろう。—誰もが(信仰)そのものを見る(see)ことができるような際立った(実)例である。

信仰は「神の言葉によって」起こる(生じる)。そうであるならば、み言葉からそれ(実例)を捜さなければならない。ある日、百卒長がイエスのみもとに来てこう言った、「『主よ、わたしの僕が中風でひどく苦しんで、家に寝ています。』」イエスは彼に、「『わたしが行ってなおしてあげよう』』と言われた。そこで百卒長は答えて言った。「『主よ、わたしの屋根の下にあなたをお入れする資格は、わたしにはございません。ただお言葉を下さい。そうすれば僕はなおります。……』」イエスはこれを聞いて非常に感心され、ついてきた人々に言われた、「『よく聞きなさい。イスラエル人の中にも、これほどの信仰(偉大な信仰—KJV)を見たことがない。』」(マタイ8:6~10)

ここでイエスは何が信仰であるかを告げている。それが何であるかを我々が見出したなら、我々は信仰を見出したことになる。それが何かを知ることは、信仰とは何かを知ることである。このことに関しては疑いの余地がない。なぜなら、キリストが「the Anchor……of faith」であり、百卒長があらわしたもののこそ「信仰」であると言われるのである。そう、さらに進んで「偉大な信仰」と言われるのである。

それでは、このどこに信仰があるのか？ — 百卒長はあることが成されるのを望んだ。彼は主にそれを成し遂げて貰いたかった。しかし、主が「『わたしが行って』それを成そう」と言われた時、百卒長は主を押しとどめて、こう言った、「『ただ、お言葉を下さい。そうすれば』それは成し遂げられます」と。

さて百卒長は何がそれを成し遂げると期待したのだろうか？ — 「ただ、お言葉」がである。僕がいやされるため、彼は何により頼んだのだろうか？ — 「ただ、お言葉」だけにである。そして主イエスは、それが信仰であると言われるのである。

さて、兄弟姉妹方、信仰とは何か？

R & H Dec. 6, 1898

信仰とはみ言葉が言われることを、そのまま成し遂げて下さると期待し、言われることを成し遂げて下さるそのみ言葉により頼むことである。

それが信仰であり、信仰は神の言葉によって生じる。そのため、信仰を教え込むために、神の言葉は、それ自体に言ったことを成し遂げる力があることを教えるに違いない。

そして、それこそまさに、事の真相である：神の言葉は、他の何ものでもない、これだけを教えているのである。それはまさしく、「忠実な (faithful) 言葉」 — 信仰に満ちた言葉なのである。

聖書の最初の章は、大部分を信仰について教えている。その章の中に信仰を教え込む明解な文が少なくとも六つある：第一節の重要な連係 (connective) をあわせれば七つある。

では、聖書の初めの一節を読んでみよう：「はじめに神は天と地とを創造された。」神はどのようにして天と地を造られたのか？ — 「もろもろの天は主のみことばによって造られ、天の万軍は主の口の息によって造られた。」

「主が仰せられると、そのようになり」（詩篇 33 : 6 ~ 9）主が仰せられる前は、それはなく、主が仰せられた後「そのようになった」。（それはあった — KJV）ただ仰せられることによってそれは存在したのである。何がそれを存在させたのか？ — お言葉だけがである。

「やみが淵のおもてにあり」神が光を望まれると、光はそこにあった：しかし、やみしかないところにどのようにして光があらわれたのだろうか？ — 「神は再び『光あれ』と言われた。すると光があった。」光はどこから来たのだろうか？ — 語られたみ言葉自身が、光を生み出したのである。「み言葉が開けると光を放」つ。（詩篇 119 : 130）

おおぞら、大気は存在しなかった。神はおおぞらを望まれた。おおぞらはどのようにして生み出されたのだろうか？ — 「神はまた言われた、『……おおぞらがあって……』そのようになった」他の訳語によれば、「そのようになった」は「したがって、そのようになった（それが起こった）」となっている。 — 何が天空を生み出したのか？何がそれを存在させたのか？「ただお言葉」だけである。主が言われるとそのようになった。語られたお言葉自体が事物の存在をもたらしたのである。

次に神はかわいた地を望まれた。これはどのようにして起こったのか？ — 「神はまた言われた、『天の下の水は一つ所に集まり、かわいた地が現れよ』。そのようになった。」

その時、植物はまだ存在しなかった。それはどこから来たのだろうか？「神はまた言われた、『地は青草と、種をもつ草と、種類にしたがって種のある実を結ぶ果樹とを地の上にはえさせよ』。その

ようになった。」

「神はまた言われた。『天のおおぞらに光があって……』そのようになった。」

「神はまた言われた。『水は生き物の群れで満ち、鳥は地の上、天のおおぞらを飛べ』。……そのようになった。」

このようにして、全てのものは「主のみ言葉によって」造られた。主はただみ言葉だけを仰せられ、そうしたらそのようになったのである。語られたみ言葉自身が事物を生み出したのである。

創造においてそうであり、救済においてもそうであった：主は病人をいやされ、悪霊を追い出し、嵐を静め、らい病人をきよめ、死人をよみがえらせ、罪を許された。全てそのみ言葉によってである。救済の働きにおいても「主が仰せられると、そのようになった」のである。

そして主は、きのうもきょうも永遠に変わることがない。主は常に創造主であられる。そして常に主は何事もみ言葉によって成し遂げることがおできになる：なぜなら、これこそ、神のみ言葉の特質そのものであり、それ自体が語られた事を成し遂げる力を備えているからである。

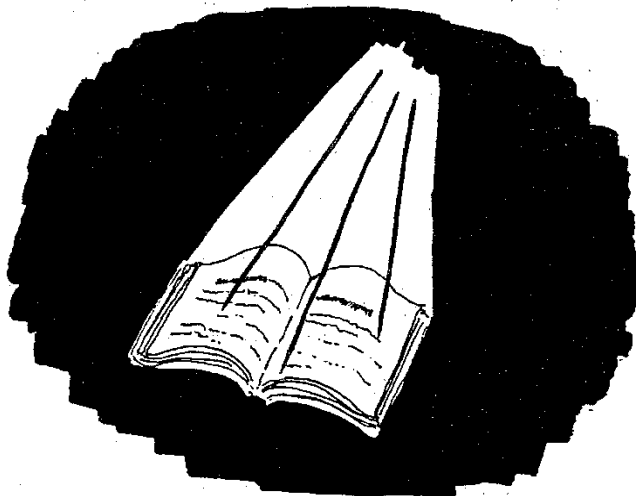
信仰とは、神のみ言葉にこの力があることを知り、み言葉が語ったことは、み言葉自身によって成し遂げられると期待し、み言葉が語ったことはそのまま成し遂げてくださることにより頼むことであると云ったのはそのためである。

神の言葉の性質はこのようなものであると教えることが信仰を教えることである：信仰を働かせることを人々に教えるというのは、み言葉が語ったことは、み言葉自身によって成し遂げられると期待し、み言葉が語ったことをそのまま成し遂げてくださることにより頼む：それを教えることなのである。信仰をみがくというのは、み言葉で言われていることは、神の言葉そのものの力によって成されることに確信を深めるよう修練する (practice) ことなのである。

そして「信仰をみがくことの必要性を我々に促している聖書の意味を知る知識は、我々に要求される他のいかなる知識よりも重要なもの」なのである。

あなたは信仰をみがいているだろうか？

R & H Dec. 27, 1898



アンカー 堅固な土台 問題点

デビッド・ミラー

何年か前に、わたしはセールスマンシップを勉強をする機会が与えられた。そこで学んだ一つの重要な教訓は、有能なセールスマンはお客に二つの選択を提供するということである。たとえば、「青いのが好きですか、緑の方が好きですか。」「エコノミーサイズが好きですか、デラックスサイズが好きですか。」というように。セールスマンはお客が買うものと思いこんでいつも行動するのである。有能なセールスマンが決してしない質問はお客が彼の製品を欲しいか否かということである。もし彼がお客の信頼を完全に得ているならば、彼はただ一つの選択しか与えない……すなわちそれはセールスマン自身が決定した選択である。

サタンはマスターセールスマンで我々に我々自身の信ずるものを形成する二つの選択を与える。その二つの選択とも間違いである。彼は決して真理か偽りかの選択を与えはしない。

たとえば、次のようなケースである。E・G・ホワイトは偽りの預言者か、非聖典預言者かのいずれかを選択するように迫ってくる。（聖典のという場合は彼女の書物が聖書と同等で、そのように扱われるべきものという意味である。）私はこの場合、二つの選択とも間違いであると思う。まず聖典の預言者というのはその書物が聖書の聖典に含まれるために保存されてきたものを言うのである。聖書に含まれていない預言者達の書物は今日手に入らない。彼らは、その書物が存在しないということと、そのために聖書に含まれないというだけで非聖典の預言者と言われる。今日、ある人々は、E・G・ホワイトは二級の預言者で、彼女の書物は聖書につぐ2級品であると思ひこませようとしている。彼らは、合法的な理由をあげることなしに彼女を非聖典の預言者と主張する。私は何も彼女の書物を全部大きな本として印刷して黙示録の最後につけ加えることを提案しているのではない。私が言っているのは第二級の預言者などというものは存在しないということである。彼女が言っているのは神から来ているのか、その勧告に留意するか、全く無視するか、どちらかである。彼女は全く預言者であるのか、全くそうでないかのどちらかである。

ある時、ホワイト夫人は彼女が本当に預言者であるのだろうかと迷わせるようなことを言った。次の言葉がそれである。

「私は預言者であると主張するようなことは決してなかった。もし他の人が私をそのように呼ぶなら、私は彼らと何も言い争うことはない」

「なぜ私は預言者であると主張しなかったか。それはこの時代に預言者であると大胆に

主張してキリストの働きの恥辱となっていることがあり、また私の働きは『預言者』という言葉の意味よりももっと広い働きを含んでいるからである」 1 SM32

ここで我々は、彼女を預言者と呼ぶ人々と言い争わないと言っていることが分かる。もし彼女が預言者としての地位を拒んでいるのなら、彼女はこれらの人々を拒絶するのであって、彼らと言い争うことはないなど言うはずがない。しかし、上記のようなことを彼女が言った理由は、その当時、預言者というのは、未来を告げるものとして一般に考えられていなかったからである。E・G・ホワイトにとってこの考え方はあまりにも狭く、むしろ彼女はメッセンジャーと呼ばれることを選んだのである。上記の言葉は十分に明瞭である。彼女は決して預言者としての身分を否定していないどころか、かえってそれを確認しているのであって、さらに預言者以上のものであると宣言しているのである。預言者以上のものであることは、彼女を第二級の預言者にしたり、あるいは非聖典の預言者とはしない。彼女とその書物に対するこの非難の理由は単純なものである。彼女はこう言った。

「サタンの最後の欺瞞は神の御霊の証を無効にすることである。……

証にたいしてサタンの憎しみが燃やされるであろう。サタンの働きは証に対する教会の信仰を揺るがすことである。そのために、彼はもし神の御霊の警告と譴責と勧告が留意されると彼の欺瞞に魂をしばりつけ、惑わすことができないので道をくらますのである」 1 SM48

注意していただきたい。上記の引用文は証の書を破壊するとか人々から取り上げるとは言っていない。彼は証を無効にしているのである。今日徐々に、巧妙に証に対する信仰が揺さぶられているのである。預言者の言葉に対する信仰は徐々に、尊敬される人間や教育家の疑わしい言葉に置き換えられつつある。この問題については後々アンカーで取り扱われることを願っている。

ある聖書研究会で

最近私は、ある教会の聖書研究会に出席した。主題は聖所とそれがいかに我々とかかわっているかというものであった。その集会で取り上げられたポイントは今日の教会で非常に重要な問題となりつつある。これらのポイントは (1)キリストは1844年に天の聖所の至聖所(異なった部屋)に入られたのか、それとも聖所で「もう一つの面」の働きを開始されただけであろうか？ (2)聖所の清めは法的な行為、帳簿上の処理だけの事なのか？それとも神の民の経験ともっと直接に関わるものなのか？ (3)S. D. A教会は他の諸教会とは違ったユニークで、特殊な教理をもっているのか、それとも教会のすべての教理は我々が世に提

示する、特に目立つものは何もなく、真理の鎖であるのか？というようなものであった。

この三点が研究され、後の更に重要な二点は不明瞭な方法で扱われた。あと二つのポイントというのは (4)教会の権威の問題と (5)E・G・ホワイトの書物の位置の問題、すなわち彼女は預言者であるのか、そうでないのか、聖典の預言者たちと同等か、劣るものなのかということであった。

部屋か局面か

(1)キリストが1844年に聖所の至聖所に入られた事についての論議は次のようなものであった。イエスが1800年以上も小さな一つの部屋にとどまって、そこを去らないなどということは信じ難いし、期待できない。だから、他の説明が必要である。そこで持ち出された説明は、イエスはその働きの違った「局面」を開始なされたのであって、何ももう一つの「部屋」に入られたわけではなかった、ということである。ここで、二つの選択が提供された。それはキリストは小さな部屋に長い期間とどまらなければならなかったということか、あるいは聖所は大きな一つのものだけで、実際は二つの部屋ではないのだということである。聖所が広大なものであるという選択は提供されなかった。E・G・ホワイトは人類のあけぼのに次のように言うておられる。

「手で造られる幕屋は、『ほんとうのものの模型』『天にあるもののひな型』（ヘブル9：24、23）……天の神殿のひな型であった。」人あ上405「地上のいかなる建造物も、その広大さと輝かしさをあらわすことができない。」人あ上421

模型

もし地上の聖所が本当のものの「模型」であるなら、門があり、幕があったのであるから、天の聖所も門があり、幕があると我々は信じなければならない。もし我々の想像でキリストがそんなに長い間小さな部屋におられることはおかしいと思われるからといって我々の信条を変えようとするなら、聖所のすべての象徴は転落する以外にない。この違った「局面」か「部屋」かと言う論議はサタンの次の欺瞞すなわち天に字義どおりの聖所などというものはないということに導くのである。

「主が設置されたものから一つの柱も取り除いてはならない。敵は聖所なんかいないという偽りの教理を持ち込んでくるであろう。」E V 224

これは天の聖所のことを言っているのである。なぜなら幾世紀もの間地上に聖所はなくなっていたからである。我々はすでに警告されていたのである。

帳簿上の検査かそれとも清める働きか

(2) この研究会で論議されたもう一つの主題は、聖所の清めは天での記録「検査」であるということであった。この検査は救いのために誰がキリストに頼っている者かを調べるためになされるものである。このような考え方は出席しているある者達には安心感を与えるものであった。このような教えは世界の教会の多くの者に安心感を与えてきた。それは信仰による義認の教理と呼ばれている。それは1888年に受け入れられなかったメッセージである。この使命の正しい理解が世界歴史の中のこの時代に重要な事である。しかしながら、その曲解と誤用は偽りの希望を与え、放縦に導く。もしこの聖書研究会で提示されたことを受け入れるなら、我々はもはや至聖所には入る必要はなく、大いなるあがないの日の時と言われるこの時に罪が除去されるために我々のすべての罪を告白する必要もなくなる。私は信仰による義認は「良きおとずれ」であるということを中心に信じている。しかし、今日放縦に導くように誤用されてきている。

この点に関して提供されている二つの選択は過去に教えられてきたように、信じて罪の宣告のまま、打ちひしがれる状態を続けるか、あるいはある人達が解釈しているような信仰による義認の受け取り方をして、再臨まで罪を犯してもかまわないと感じ、最後のあがないの日のこの時に罪が除去されることを期待しないかのどちらかである。。

ここに聖書の真理は提供されなかった。「この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである。」レビ16：30 それに数多くのE・G・ホワイトの書物は提示されなかった。

(3) 第三番目のポイントは、S・D・A教会は現代の世界に対して特殊なメッセージをもっているかどうか、あるいは我々が世に提供する必要な真理はただ真理の鎖で、我々が信じているそれだけなのだろうか？ E・G・ホワイトの書物の次のような言葉を考えていただきたい：

「私は、セブンスデー・アドベンチストの信仰と週の第一日を守る者達との間に顕著な違いを少なくするように人はあらゆる方針を採用するということを告げられた。この争闘に全世界が巻き込まれるであろう。我々の軍旗（特色）を引きおろす時ではない。私はセブンスデー・アドベンチストの名を帯びながら、我々をかくも特殊な民とする旗印をあまり目立つようにすべきでないと提案しているグループを見せられた。彼らは我

々の機関の成功を確保するためには最善の方針ではないと主張した。この特殊な旗印は恩恵期間の終わるまで掲げなければならない。」2SM385

もし我々の教理のすべてを「鎖」と見るなら、それらはみな等しいものと見る。もし誰かが我々は真理の鎖をもっていたと説明するなら、おそらく私は心から賛成するであろう。しかしながら、この聖書研究会で提示された他のすべてのポイントと一緒に結び付けられたら、アドベンチストが長い間保持してきた聖所の真理を軽視する試みだと思いはじめるのである。その鎖という考え自体は無害のように見えるが、しかし、E・G・ホワイトの大争闘の言葉と比較する時、我々には今日特殊で重要な真理がゆだねられていることが分かる：

「聖書の中で、他のどの聖句よりも、再臨信仰の基礎であり、中心的な柱であったものは、『2300の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する』という宣言であった。（ダニエル書8：14）」大下119

「天の聖所は、人類のためのキリストのお働きの中心そのものである。それは、地上に生存するすべての者に関係している。それは、贖罪の計画を明らかにし、我々をまさに時の終わりへと至らせて、義と罪との戦いの最後の勝利を示してくれる。すべての者が、これらの問題を徹底的に研究し、彼らのうちにある望みについて説明を求める人に答えることができるようにすることは、何よりも重要なことである。

「天の聖所における、人類のためのキリストのとりなしは、キリストの十字架上の死と同様に、救いの計画にとって欠くことのできないものである。」大下222

上述の三点に一貫して流れている脈略は第4と第5のポイントである。あの聖書研究会で提示されたことを信じることはE・G・ホワイトの書かれたことを否定することである。彼女の書物が直接に攻撃はされなかったが、ただ一度、提示されているポイントを証明づけるために使われた以外は、見過ごしにされ、無視された。はっきり覚えている引用文は真理は漸進的であるということで、このいわゆる「新しい真理」は多分にE・G・ホワイトの言葉の成就であるという印象を与えた。もし世界があなたを大統領にしたとする（選んだ）。しかし、あなたの信じたこと、与えた命令をすべて無視されるなら、あなたはほんとうに世界の大統領だといえるだろうか？ もし我々が預言者の言った事を無視するなら、我々は本当に彼女を預言者として受け入れている事になるだろうか？そういうことはない。もし我々がその説を支持しようとして彼女の書物から引用する場合、我々は二つのことをすることになる。(1)はそれらを誤用する (2)は、実際はそうでないのにそれらすべてと調和しているという印象を与える。

もしサタンが二つか、それ以上の選択を与えて、その一つを信じさせることができるなら、彼の勝利である。しかし、むしろ彼がしたいのは、一つの偽りの選択を与えてそれを信じさせることである。そうしたならば彼はその旗の下に我々を集め、もっと効果的に我々を支配する事ができる。こうして彼は神に忠誠を尽くす者たちに対抗するために軍隊を召集するのである。

今日彼は、イスラエルの教師達に信仰をおかせることによって我々を支配しようとしている。その聖書研究会で用いられた権威ある引用文は教会で印刷され、神学者によって書かれたものであった。その集会で、提示されていた問題に関して私はあえて質問した時、その集会スピーカーは、本を掲げて「この本は世界総会で出版されたものです。」と言った。私はイエスの時代の世界総会は間違っていたのではないかと言った。それに対して何も答えなかった。

私は何も、それが世界総会で出版されているから間違っていると云おうとしているのではない。私はそうだから正しいものとされるのではないと云おうとしているのである。セブンスデー・アドベンチストはすべての真理は「おきてと証」によって試されなければならないといつも言ってきた。真理はひとりの人やあるいはグループがそういうから真理だと言うのではなく、むしろ彼らの論証は神のみ言葉にもとずくから真理なのである。

S. D. Aの出版所からの本でなければ読まないと言うのを聞いたことがある。彼らはS. D. Aの指導者達が承認しないものは信じないというのである。私が1964年にS. D. Aに改宗したとき徹底的に教えられたのは「ただおきてとあかしに求めよ」ということであった。「聖書から真理を学び、その光に歩み、そして他人にも自分の模範にしたがうように励ます事は、すべて理性のある者の第一にして最高の義務である」大下365 我々の信仰を他人の決定にまかせ、真理を受け入れるか、拒むかを他人の言うことにまかせるのはカトリックであり、プロテスタントではない。

カトリックの侵入

S. D. Aにカトリックが侵入しているという考えに関して次のE・G・ホワイトの夢を学んでいただきたい。

「私は、ある夜バトクリークで夢を見た。ドアの小さなガラス窓から外を見ると、二人づつ組んで行進して来る一行が自分の家に向かって来た。非常にいかめしい顔付きであった。私は彼らをよく知っていたので迎え入れようと思ってパーラーのドアを開けようと思ったが、もう一度見た方がいいと思った。光景が変わった。その一行はカトリックの行進の出現ではないか。ひとりの者は手に十字架を持ち、他のものは葦を持っている。彼らが近づく

と、葦を持っている者が家をとり囲み、3回も次のように言った。

『この家は法律の保護が除かれた。財産を押収せよ。我等の聖職に対して悪口を吐いた。』
恐怖が私を襲い、家中を走り回り、北口のドアから抜け出たときには、自分はその一行の中にいた。その中には私の知っている人達もいた。しかし、裏切られる恐れゆえにあえて一言も彼らに話さなかった。．．．」1T578

144、000人

私とその聖書研究会でスピーカーに、もし144、000人が仲保者なしに悩みの時に立つために完全な品性を形づくっていなければ、サタンはどんなに喜ぶであろうと言ったら、出席していた他の人達に私は完全主義者に違いないと提示した。私が推測するのに、彼は、ラロンデルとヘッペンストールという二人のS. D. Aの神学者の定義を使っている。つまり、イエスの再臨の前に聖徒達は完全になると信じるものはだれでも完全主義者というのである。私は答える：144、000人は「しみもしわも、そのたぐいのものが一切ない」人達であると。

「天の聖所におけるキリストのとりなしがやむとき地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なしに立たなければならない。彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血をそそがれて罪から清まっていなければならない。キリストの恵みと、彼ら自身の熱心な努力とによって、彼らは悪との戦いの勝利者とならなければならない。天で調査審判が行なわれ、悔い改めた罪人の罪が聖所から除かれているその間に、地上の神の民の間では、清めの特別な働き、すなわち罪の除去が行われなければならない。この働きは、黙示録14章の使命の中にさらに明瞭に示されている」

「この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである。『その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる』（マラキ3：4） その時、主が再臨されてご自分のもとに受け入れられる教会は、『しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、．．．栄光の姿の教会』である。（エペソ5：27）。また、その教会は、『しののめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者』である」（雅歌6：10） 大下140-141 2T355参照。

144、000人の完全を否定し、恩恵期間の前の聖徒達の完全を否定するためにはE・G・ホワイトの書物をまず廃さなければならない。それは再臨運動と聖所のきよめをすべて否定することである。それはアドベンチズムを否定することである。それはすでになさ

れて来たし、またなされているし、恩恵期間が終わるまでなし続けられるであろう。

後記：

S. D. A教会が直面している問題は多い。ここに提示された事はある人達にとっては混乱させる事かもしれない。そのポイントは小さく、重要でないと思われるかもしれない。ただお勧めできることは「アンカー」を続けて読まれて、自分で判断なさることである。この最後の時代にサタンのわなから逃れるためには、たゆまない不屈の努力が必要とされる。この世の思い煩いで忙し過ぎる人はこれらの問題をまじめに研究しないであろう。そういう人は誰か他の人にまかせるのである。彼らは備えができておらず、気がつかない間に事が起きた時には遅すぎるのである。「アンカー」は次々「問題点」を出版するであろう。教会のこれらの問題点には、アルファとオメガ、教会の憎むべきこと、開かれた門、閉じられた門、エゼキエル8章の25人の人々、印する働き、日曜休業令のテスト、その他多くの問題点等。．．．自分の命がかかっていると思ってこれらの事を祈りのうちに、研究していただきたい。事実そうなのだから。



人の能力と才能

R. D. プリンズミード

知念 かおり 訳

1. 人の能力は三重である。 「……肉体、知性、霊性などの全ての能力は訓練されなければならない。」 5Tp 222

「肉体、知性、霊性を結合させた全存在としての奉仕をキリストはご要求なさる。」 6BC p 1087, 参照MYP p 236, 3Tp 51, MHp 128

「アダムが創造主のみ手によってつくられたとき、彼の肉体と知能と霊性は、神のみかたちをそなえていた。」 教育 p 4

注: これらの三重の能力は、肉体、知的能力、道徳的能力、あるいは肉体、知性、霊性、または肉体、知能、道徳性として示されている。道徳性という表現の意味はそれらの能力の動きが善と悪の行為に関係するものである。それは又、霊的な能力と呼ぶこともできる。Webster の New Collegiate Dictionary は「霊性」は心の知的な高い才能に関係していると言っている。

肉体的能力……人の全構造

知的能力……知的な能力が存在する頭脳の全構造。それらは理性、観察、知覚、思考、記憶などである。

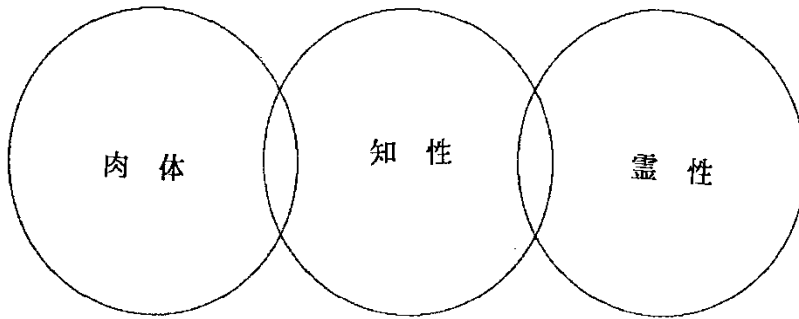
道徳的能力……霊的な心の全構造、あるいは「教会への証」4巻、p 85 が表現している「心の道徳機構」道徳性、また霊的な範囲には思考、意志、感情などの能力が含まれている。

2. 神のかたちに造られた。 「主なる神は土のちりて人を造り……」 (創世記 2: 7) 『かたち造り』KJV という表現は正しく理解されなければならない。他の被造物は言葉によって創造された。しかし、神の写しとなるべく、この特別な秩序をもった存在に関しては異なっていた。人の全ての能力、才能は「神のかたちに」造られたのであった。彼の肉体は神のみかたちをそなえていた。(Ed p 45, PP p 18~20) その心は神性をおびていた。「神にとって人を創造するということは素晴らしいことであった。神は全ての能力が神のみ心の能力となるように創造なさった。(6BC p 1105)

肉体、知性、霊性の相互関係

肉体、知性、霊性の相互関係を理解することは非常に重要なことである。もし、それがなされないならば、第三天使の使命の重要な部分の多くは理解することが不可能になってしまうであろう。

これらの三つの関係を以下のように表現するとすれば



これは非常に誤った表現である。上記のイラストレーションは人の能力のある程度の相互関係しか表わしていない。しかし、その関係は、ここに表わされているよりも更に深いものである。その正しい立場を以下に表わしたい。

1. 肉体的能力 人は基本的には土のちりから造られた物質的構造なのである。とは言え、神のかたちに、人の行為が一つとしてそれが肉体の機能でないものはないのである。

考えることを例にとってみよう。それとて肉の頭脳の肉体的機能なのである。今日ではその大部分が化学的なプロセスであるということが知られている。祈りを通して神と交わることもまた肉体的機能である。そして神は肉体の媒介を通して交わられるのである。

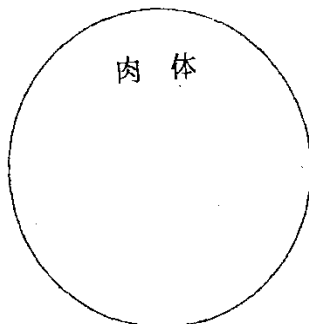
「全ての組織と通じる脳神経は天が人と交わる唯一の媒介であり、彼の魂の最も深いところに影響を及ぼす。」(2Tp347)

この思想が第三天使の使命の「右腕」に特別な力を与えるのである。それは次に示す勧告において最も明白である。

「肉体は知能や精神が品性向上へと発達するための唯一の媒体である。」(MHp100)

「心と魂は、肉体を通して表現されるのであるから、知的また霊的な力は肉体の力と活動によって大いに左右される。肉体の健康を増進するものはすべての強い精神と均齊のとれた品性の発達を助長する。人は健康でなければ自分自身に対する義務を、また人類同胞に対する義務と創造主に対する義務を、はっきり理解することも完全に果たすこともできない。したがって健康は品性と同様に忠実に保護されなければならない。生理衛生の知識は全ての教育の働きの根本でなければならない。」(Edp232)

ゆえにこの肉体的能力を表わすのに円を用いて表現してみたい。これは肉体の器官を通して機能し、生きる人の全存在を包含する。



2. 知性 or 知的能力 人の知性は彼の肉体の重要な部分である。何でも体に影響を及ぼすものは、知性にも影響を与えと言われるのはこの為である。

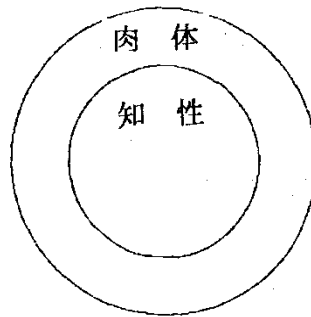
「健全な知性には健全な肉体を要求される。」(3Tp152) 「肉体を顧みないことは知能をも顧みないことである。」(3Tp486)

「まちがった肉体の習慣は……良き知性の訓練を妨げる。」(CTp299)

「肉体の健康を増進するものはすべて強い精神と均齊のとれた品性の発達を助長する。」

(Ed.p232)

それでこの基礎となる円の中に、知的能力を表わすもう一つの円を描くことができる。



3. 道徳的能力 道徳的能力は明らかに知的能力の一部である。それは又、明らかに肉体の器官の一部である。又、肉体に全て包括されているゆえに肉体に影響を及ぼすものは全て靈性にまでその影響は及ぶのである。

「知的道徳的能力は肉体の健康にかかっている。」R&H Oct31,1871

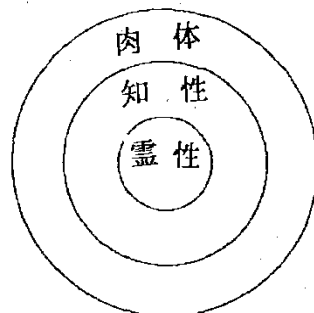
「肉体と道徳的な健康は密接に結ばれている。」HL. p55

「肉体と靈性の間には密接な関係が存在している。」CD. p165

「肉体的な力を弱めるものは何であっても心を弱める。」CD.p48

「何でも健康を害するものは肉体の活力を弱めるばかりでなく、知性と靈性も弱める傾向がある。」MHp128

そこで靈性をあらわす第三番目の円を描くことができる。これで靈性ばかりでなく、肉体、知性全てを表す円が出来上がった。



高貴な性質と下等な性質

「高等な性質」と「下等な性質」という表現は人間の能力、機能を分けるもう一つの方法である。

「高等な性質」は知的、道徳的能力によって構成され、それによって人は神との交わりに入り、動物界のレベルよりはるかにうまわるものとなるのである。

「下等な性質」は動物界に共通する肉体を指す。これらの性質は食欲やその他の本能が含まれる。

「下等な性質」そのものは罪深いものではない。それらは高尚で清い目的のために人に与えられたものであるが、神のご計画はそれらの性質が「高等な性質」によって支配されることであった。

1. 高い力に支配させる。 「……すべての動物的な欲望を魂のより高い力に屈服させなさい。」

AHp 131

「……もし、啓発された知性がたづなをとり、動物的な性癖を統御してこれを霊的な能力に服従させるなら、人はちょっとした力で誘惑に打ち勝つことができるということを、サタンは知っています。……」 MYP p 233

「理性が食欲を支配すること、そして食欲がわたしたちの幸福に役立つことが神の意図されたことでした。食欲は、きよめられた理性によって整えられ、支配されるときに主に対して聖なるものとなるのです。」 CG p 406

2. 「下等な性質」は高く清い目的のために与えられた。

「我々の動物的な性質の欲求は厳格に服従させなければならない。それらの欲求は重要な目的のために、又、良いことのために与えられたのであって、歪められて欲情を欲しいままにすることによって死の使い（使者）となってはならない。」 4Tp 244

「わたしたちの生来の食欲や好みは……神が定められたもので、人間に与えられたときには清く聖なるものでした。」 CG p 406

「理性が食欲を支配すること、そして食欲がわたしたちの幸福に役立つことが神の意図されたことでした。食欲は、きよめられた理性によって整えられ、支配されるときに主に対して聖なるものとなるのです。」 CG p 406

注：下等な性質は高等な性質の支配のもとにある時、人に魂の聖なる感情をもたらすことによって幸福を増進するのである。それらの聖なる感情とは賛美、感謝、喜び、満足、愛情などであるゆえに下等な性質は高等な性質を発達させるために与えられ、神による人間の可能性を増すのである。



公式の勝利説

1888年のミネアポリスにおける世界総会は、セブンスデー・アドベンチスト歴史の明らかな道標である。…これはまさに輝かしい勝利であった。

この総会は成功のうちに終わった。…主はその民に驚くべき勝利を賜った。

それは信仰の覚醒と成長の、新しい時代の到来を告げるものであった。

信仰による義認に関して与えられた光が、最も多くの魂を勝ち取ったのは、実に1893年の世界総会でのことであった。

あの素晴らしいミネアポリスにおけるリバイバルの後、教会は大いに消められ、伝道も豊かに報いられた³¹。

今世紀の終わりになって、教会は1888年の福音によって、神のみ業を成就するために備えられた一団へと発展していった³²。

セブンスデー・アドベンチスト教団の働き人と信徒は、ミネアポリスで提示された事を受け入れて祝福された³³。

これは教会が全体として、あるいは指導者たちが1888年のメッセージを拒んだということになるのだろうか。とんでもない。ある人々は確かに拒んだだろうが、それは声を大にして拒んだ少数派であって、その他の人々は喜んで受け入れたのである。また初めのうちは混乱していた人々もいたが彼らもすぐに受け入れていった。新任の指導者たちも、この新しい主張を心から喜んで受け入れた³⁴。

赤城山学園修養会 1888年資料より

ある人達は次のような論法で我が教会も1888年のメッセージを拒みはしなかったと主張する。知っている者には滑稽としかとれない。しかし、知らないものにとっては歴史的な、確かな証拠として受けとられるであろう。下記のもの、ある人がユダヤ人はキリストをメシヤとして受け入れたことを証明する「14のポイント」としてまとめたものである：

1. 「あるもの」は彼を受け入れた。使徒行伝17：4、ヨハネ1：12を見よ。
2. 12弟子達は皆ユダヤ人であった。
3. 使徒パウロはユダヤ人であった。
4. アポロはユダヤ人であった。
5. イエスご自身がユダヤ人であった—彼は彼自身を受け入れた。
6. 福音書は、ルカ以外は全部ユダヤ人によって書かれた。
7. エルサレム教会はユダヤ人が優性であった。
8. 少なくともサンヒドリンの二人の議員がキリストを受け入れた—ヨセフとニコデモ。これは確かに「ある者達」であった。
9. サンヒドリンの議員の一人であったガマリエルは、使徒たちに反対しなかった。
10. 「祭司達も多数、信仰を受け入れるようになった」使徒行伝 6：7
11. 新訳聖書は、多分ルカを除いて、全部ユダヤ人によって書かれた。
12. 「大勢の群衆は、喜んでイエスに耳を傾けていた」マルコ12：37
13. ユダヤ人はイエスを王にしようとした。ヨハネ6：15（これは拒んでいると思えるだろうか？）
14. 「ユダヤ人が、... 大ぜい信じた」使徒行伝14：1

“An Explicit ConfessionDue the Church” より。

完全な品性に関する質問と反対

金城重博

質問1. アブラハム、ノア、ダビデ、アサ、ヨブは全き人と呼ばれているではないか？（創世記6：9，17：1，歴代志上28：9，列王紀上15：14）

また、聖い品性を持っていたダニエル、ヨハネ、パウロ等も完全な人々ではなかったか？それ以上我々に何が要求されているのか？

答：「完全」という言葉は、「相対的」と「絶対的」意味で用いられる。（ピリピ3：12，13）、そして相対的な意味で用いられている場合が多い。アブラハム、ノア、ダビデ、アサヨブは「全き人」であったという意味は「正しい、誠実な、堅実な、道徳的に優れた、高潔等の意味で用いられている。聖書はこれらの人々は罪なき状態であったとは言っていない。むしろ反対のことを言っている。「善を行い、罪を犯さない正しい人は世にいない。」（伝道の書7：20）「だれが『わたしは自分の心を清めた、わたしの罪は清められた』ということができようか。」（しん言20：9）「人は罪を犯さない者はないのです。」（列王紀上8：46）「罪を犯さない人はいないゆえ」（歴代志下6：36）「わたしたちは皆、多くのあやまちを犯すものである」（ヤコブ3：2）

「使徒や預言者たちの中には、だれも罪がないと主張した者はいない。神に最も近く生きた人々、知っていて悪い行いをするよりはいのちを犠牲にしようとする人々、神が聖なる光と権能をもって賞賛した人々は、自分たちの性質の罪深さを告白してきた。」（患難から栄光へ下p264）

「ヨハネは真の清めの祝福を楽しんだ。しかし気をつけていただきたい。使徒は罪なきことを主張していない。彼は神のみ顔の光の中に歩いたことによって完全を求めているのである。」SLp48

相対的、絶対的完全については、M. L. アンドレアセンの言葉に留意したい。「聖書が『完全』という時、二つのことを意味している。……完全な段階（ステージ）に立っていないながら、不完全という場合と、完成した完全という場合である。ピリピ3：12のパウロの言葉に気をつけていただきたい。『わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になっているとか言うのではなく、ただ捕えようとして追い求めているのである。』パウロは『完全にされた』A. R. Vとは言うておらず15節に彼は『だから、わたしたちの中で全き人たちは、そのように考えるべきである。しかしあなたがたが違った考えを持っているなら、神はそのことも示して下さるであろう。』と述べている。12節に彼は完全でないと言い、15節に完全であると言っている。ヤングは12節を『すでに完全にされている』と訳し、15節を『だから多くの者は完全である』と訳している。ロバートソンは、Word pictureに、12節の『完全』は Teleiooの『完了受動形叙述法（完了した状態）』であると言っている。パウロははっきりとそれ以上発達しない霊的な行き詰まりに達したことを否定している。彼はただ一つの経験で、いわゆる突然の絶対的完全と呼ばれることを確かに否定している。パウロは

キリストに似ることに非常に進歩した。しかし、尚も彼は後ろではなく前に置かれている目標を目指している。』

15節の『完全』について彼は『*teleioi*、つまり相対的完全を意味する言葉を使っている。12節ではっきり否定している絶対的完全ではない』4巻p454, 455

これはパウロの言葉をよく説明している。パウロは絶対的完全、聖潔を主張していない。しかし、相対的完全を主張している。これは16節に『わたしたちはすでに達した』あるいは『わたしたちがきたところ』と強調されている。しかし、それがどの時点であろうと、我々は相対的に完全なのである。

パウロが達しなかったところの完全に誰かが達するだろうか？もしパウロが絶対的完全を主張していたなら、我々は失望させられるであろう。なぜなら、それに到達する人は決してそれを主張しないし、おそらくそれを知らないであろうから。神は知っておられるが、人は彼自身ではそのような主張はしないからである。

しかし、そのような段階まで到達する人がいるであろうか？我々はそうだと信じる。黙示録14：4, 5の14万4千についての描写を読んでいただきたい。『彼らは、女にふれたことのない者である。彼らは、純潔な者である。そして、小羊の行く所へは、どこへでもついて行く。彼らは、神と小羊とにささげられる初穂として、人間の中からあがなわれた者である。彼らの口には偽りがなく、彼らは傷のない者であった。』

彼らは『神のみ座の前に傷のない者』であることに留意してほしい。彼らは『聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ』（黙示録22：11）と言われている人々に入る。彼らは12節から言われている主の来臨の時に生きている人々、聖に達した人々のことを言っている。そうでなければ『聖なる者は聖なることを行うままにさせよ』と真に言われ得ない。

聖なる状態に達したと主張する者は、誰であっても、その人こそそれに欠けていると言われる人である。罪深い人間が神に近づけば近づくほど、その人は自分の過ちをもっと意識するのである。これは完全に到達することに誰も失望させるために書かれているのではない。ただそれに達したと主張することをやめさせるためなのである。聖さに達するために神の力に全く自分自身をゆだねるように明確な呼び掛けがあることは確かである。終わりが来る前に良き物に欠けない人々を神はお持ちになるであろう。彼らは神のみ像を完全に反映するであろう。』

M. L. アンドレアセン ヘブル人への手紙 p466~468

日毎の経験で、先の雨を受けている人々は、相対的に完全と言われている。「成長中のどの段階においても、わたしたちの生命は完全であり得るのである。」（キリストの実物教訓p45）「あなたの持っている知識に従って、キリスト・イエスにある完全な人に達している。」と言われる人々である。（ISM p109~110）そういう人々はいつ死んでも、安らかに眠り、復活にあずかれる。彼らは「罪を犯さなかったものとして、キリストにあって、みなされるのである。つまり罪なき立場（*standing*）に置かれる。しかし悩みの時を通過し生きて主を迎える人々は罪なき状態（*state*）にされるのである。（大争闘下p140, 141）「実が熟する — 道徳的完全」に「後の雨によってなされる」のである。（TM p506）

※近日中に出版予定のデビッド・ミラー著「モーセと小羊の歌」によく説明されている。

「生きて主を迎える事と死んで主を迎える事との相違」パンフレットは必読！

質問2. 後の雨を受ける前に我々は絶対的完全に達しなければならないのではないか？

後の雨が完全にすることを期待してはならない。次のように書かれている：

「我々の品性に一つのしみ、しわがあるならば、我々は決して神の印を受けることはない。我々の品性の欠点を改め、心の宮から全ての汚れを清めることは、我々にゆだねられていることであり、その時に秋の雨がペンテコステの日に弟子達に下ったように、春の雨が我々の上に下るのである。」 5Tp 214

答え：同じ著書は明確に、最後のあがないの時に、後の雨の力によって我々の中に恵みの働きが完成されると言っている。次の二つの引用文に留意されたし：

①最後のあがないの働き 「ヨシヨアと天使とのゼカリヤの幻（ゼカリヤ書3章）は、あがないの大いなる日の閉じる時代の神の民らの経験に特別な力をもってあてはまるのである。……誘惑者は、ヨシユアに抵抗するために彼のそばに立ったように彼らを非難すべく、その脇に立っている。彼らは彼らのその汚れた着物、すなわち欠点の品性を指し示すのである。……神の民が、神のみ前にその魂を悩まし、心の清められんことを願い求める時、命令が下される。『彼らの汚れた衣をぬがせなさい。』そして、励ましの言葉が与えられる。『見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう。』キリストの義の汚れない衣が試みられ、誘われても尚、忠実であった神の子らの上に置かれるのである。さげすまれてきた残りの者たちは輝かしい衣を着せられ、もう決して世の汚れに汚されることはない者とされるであろう。」 5Tp 472～475

②後の雨によってもたらされる変化 「季節の終わり近くに降る後の雨は穀物を熟させ、刈り入れに備える。……穀物が熟するということは魂の中に神の恵みのみ業が完結することを表わしている。聖霊のみ力によって神の道徳的かたちが品性に完成されるのである。我々は全くキリストに似たものに変えられる。……先の雨がその働きをしないならば、後の雨は完全の実を結ぶことはできないのである。」 Tmp 506

「わたしは、何がこのような変化をもたらしたのかを尋ねた。『それは後の雨、主のみ前からの慰め、第三天使の大いなる叫びである。』と天使は言った。」 初代文集 p 440

では「我々すべての品性の欠点を改め、心の宮からすべての汚れを清める」ということは何を意味するのだろうか？それはすべての罪を克服し、さばきに先立って全てをキリストのもとに送ることである。「品性の欠点」という表現は預言の霊に克服されなければならない個々の罪としてしばしば用

いられている。5Tp 214の言述はペテロが言ったことを述べているに過ぎない。「悔い改めて本心に立ちかえりなさい。それは、あなたがたの罪が除去され、主のみ前から慰めが降るためである」と。使徒行伝3:19

徹底的に悔い改めている者、日毎に悔い改めている者は後の雨を受け損じることはないかと恐れる必要はない。ペテロは我々が悔い改めているなら、我々の罪は後の雨が来る時に除去されることを示している。なぜなら、悔い改めてキリストの中にあると見られるなら、キリストの義を着ているのである。「キリストの義は、純潔な白真珠のようにしみも傷もない」(キリストの実物教訓p92) 神の民がこの信仰による義認の使命を完全に受け入れるなら、主は完全にする後の雨を送ってくださる。(TMp92, 506)

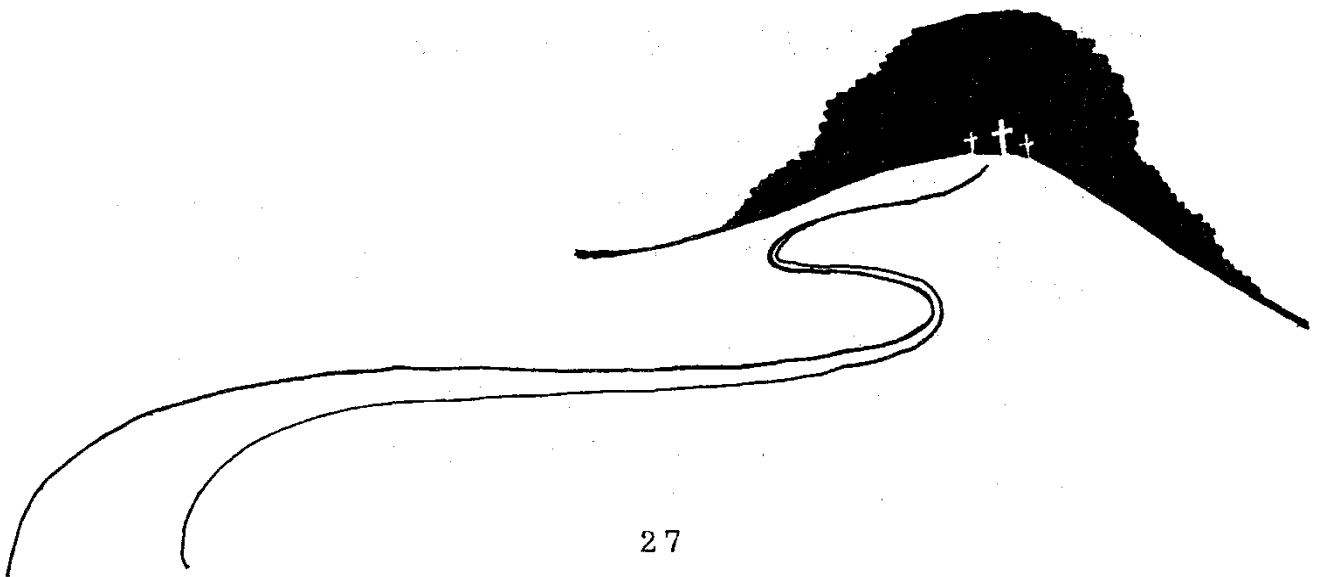
しかし、再び言わせてほしいが、日毎に悔い改める者は(これはどんなに想像をたくましくしても絶対的完全を意味しない)後の雨を受けるのである。:

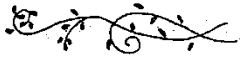
「今日あなたは神に自分をあけわたすべきである。そうするなら、神をあがめることにならない自我、嫉妬、妬み、悪口、争い、全てが空になるであろう。今はあなたは器を清めて天の露に備え、後の雨に備えなさい。なぜなら、後の雨の祝福は全ての汚れから清められた全ての魂を満たすのであるから」ISMp191

我々の問題と言うのは、さばきに立つにふさわしい者とし、後の雨を受けるに適する者とする信仰による義認の力強い経験に躓くことである。もし我々がこの経験を持つならば、我々は毎日、その時その時、勝利者となるであろう。

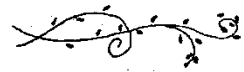
聖書と証の書には、矛盾ではなく、パラドックスがよくある。二つ相反するように見える言述は、どちらか一方だけを受け入れると、とんでもないジレンマに陥ってしまう。解決は両方を受け入れることである。例えば:

パウロは「信仰によって義とされる」と言い、ヤコブは「義とされるのは行いによる」と言う。或るところには天国に「獅はいる」と言い、或るところでは「獅はいない」と言う。それらをどう解決したら良いのか、賢いアドベンチストはお分かりと思う。





皆様に研究して頂きたい宿題：



1. 最近、日本の教役者会で、キリストの性質について、キリストはアダムが墮落する前の性質をとられたという統一見解を出したという事を聞かされました。次の二つの考えはどちらが正しいのか、どう解決したらいいのでしょうか？

- (1) キリストはアダムが墮落する前の罪なき性質 (Sinless Nature)をとられた。「教理の研究」
- (2) キリストはアダムが墮落して後の、墮落した、罪の性質(Sinful Nature)をとられた

この問題はクリスチャン品性とどのように関係してくるのでしょうか？

2. 人間の性質に関して：

- (1) 最近、東京中央教会で、全牧師を対象に神学セミナーが持たれたそうです。アンドリュウス大学のデドロ博士の講義録に次のようにあります：

「我々は、アダムの罪の故に、罪への傾向を持って生まれてきた。しかし、これは決して罪人として生まれてきたということではない。なぜなら罪とは自分で犯してはじめて私の罪となる。この意味において我々S. D. Aは原罪の教理を信じない。生まれながらにしてすべての人が罪人である、という教理はオーガスチンが考えたもので、この故に幼児洗礼を確立した。以後、カトリック、ルーテル、長老派の教理となり、幾千幾万のクリスチャンの教理となった。しかし、我々S. D. Aには原罪の教理はない」

- (2) 昭和59年第4期の教課の助けに、高橋義文先生は次のように書かれました：

「原罪という言葉は、通常3つほどの意味で用いられている。

- (1) 人類の最初の罪、すなわちアダムが禁断の木の果実を取って食べ、神の命令に背いた罪——『原初の罪、最初の罪』=オリジナル シン(Original Sin)=アダムの罪を指す。
- (2) このアダムの罪が後代の人間に転嫁されていること。アウガスティヌスはこの意味で用いている。=『遺伝的な罪』、もしくは『相続された罪』。特にアダムとエバから生殖作用を媒介として代々相続されてきた罪。
- (3) 人間の罪性の普遍性と執拗性を示す言葉として用いられる。これについては勿

論2番目の用法である罪の転嫁ということも同様にそれを強調しているが、ここではそれをより一般的に把え、しかも相続、転嫁という経過ではなく、むしろその結果に注目している。...

アウグスティヌス的な生殖による生物学的遺伝という原罪の考えは拒否しなければならない。しかしその上でやはり罪の転嫁ということは聖書にしたがっていると云わなければならない。理屈にあった説明はできないが、アダムの墮落後の人間は神への離反の状況の中に生まれるに至ったこと、そしてその中で主体的に罪を犯してゆくこと、そしてそれは普遍的であること、その根はどうしてもアダムにまでさか上らなければならないほどに根強いこと—こうしたことを原罪として確認しておかなければならないと思う」 7、8頁

「ここに興味深い表現が見受けられる。『悪への傾向』『罪への傾向』という表現である。これはおそらく、具体的な罪の行為以前の状態を指している表現であると思われる。『原罪』にあたると言ってよいかも知れない。すなわちキリストに原罪はなかったということである。しかし私どもには原罪がある。この違いは決定的である」 32頁 モリス・ベンデン、ヘッペンストールの本を参照。

まとめて：

- (1) 我々は罪人としては生まれてこなかった。原罪はない。罪とは自分で犯して(罪の行為)、はじめて自分の罪となる。
- (2) 罪とは、本来人間の存在の基盤であり、生を中心であるべき、神からはずれて離れてしまった状態を言う。自己中心の態度。具体的な罪の行為以前の状態「罪への傾向」=原罪を我々は持って生まれてくる。

この二つのどちらが正しいのでしょうか？ かみ合わない考えは、言葉の定義の違いからくるのでしょうか？

3. 罪深い性質(Sinful Nature)はいつなくなるのでしょうか？

- (1) 罪深い性質、罪の根、罪への傾向は、改心、新生の時になくなる。1ヨハネ1：9
- (2) A) 「原罪、罪の泉は再臨まで残る」 ヘッペンストール
B) 完全主義とは「罪の性質がなくなる。.....」ことを含む。

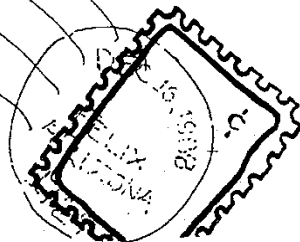
赤城山学園、春の修養会資料、引用文リスト9頁-88

ウィーランドは再臨前に罪なき完全を信じている。AとBの罪の性質の定義のくい違いがあるようである。

- (3) 再臨の前に、恩恵期間の前に、罪への傾向、原罪は取りのぞかれる。

Anchor
14710
No

読者からの声



☞ 良い記事を書いて下さって励まされ、覚醒させられます。他の人々にも紹介して喜ばれています。

Y. M.

☞ 「開かれた門」を読ませていただきました。聖書を開いて一節、一節、聖句を引照しながら読みましたが、まったくその通りであると思いました。時は今まさにタイムリミットの時に来ており、…僕自身もっと深く学ばなくては、と思っています。

K. M.

☞ 大そうな励ましをいただきました。感謝いたしております。

……信仰の高い理念と思想をもって斯くのごとき立派な読み物を全国のSDA信徒に力強い奨励と信仰の覚醒のために出版なさっておられますことは真に感謝にたえません。

I. W.

☞ 今日のSDAに対する神のみ旨は何かについて学ぶことができ、大いなるチャレンジを個人的に受けました。

S. K.

☞ 現実感に導かれる聖言の適用と厳粛な場面に思いを走らせてくれる聖画は、SDAとして理想の表現と感激しております。

T. W.

☞ 以前から三天使の使命というのが頻繁に出てきて、わかっているようでわからない自分なのです。「開かれた門」を読み始めた時から、これはうやむやにすべきでなく、はっきり知りたいたいと思いました。引照の部から更に引照という方法で、時間がかかりますが、祈りつつ勉強しております。

E. H.

☞ 至聖所のイエス様は、私達にはばからず、もっともっと近づいて来なさい、と今、招いておられますので、どんどん近づいていきたいと思えます。

Y. M.

☞ 単刀直入な聖言と証の書による、明確なご指摘とお勧めは、現在の信仰の柱のように思え、如何なる解し難い問題も主のみ前に襟を正して出ささせていただく事によってのみ解決できる事をも感じます。霧に包まれたように不鮮明になってきているSDAの教えが、きちっと文字通り（現代の真理）また（残りの民）として黙示録10：11の預言の成就として信じていくことができた信徒の一人としてのあるべき（心構え）に立たせていただけたように思い、感謝にたえません。

T. W.

☞ み言葉と証の書に無知な私ですが、世の煩わしさの中で鈍りがちな信仰に、霊的自覚を促す現代の真理を具体的に教え、悟される神への思いに高められるので、本当に感謝しております。

M. S.

☞ 霊に満ちたメッセージはラオデキヤの私共一人一人に対して覚醒を促してくれます。今こそ、全き贖いの大なる日に備えなくてはならないということを痛感させられています。現代の真理を正しく理解し、信じていく時に伝道の働きも活気に満ちた結果を見ることができないのではないかと考えています。

S. K.

☞ こんなにうすいのに内容は充実していますね。

M. O.

☞ 私に自分で聖書を調べることの重要性を再認識させ、より深い真理へと導き、SDA教会に吹きまくる教理の嵐に惑わされることのないよう安全なところに導いて下さることを心より、感謝しています。……これからも現代の真理について深く学んでいきたいと思っています。

M. N.

☞ 私達SDAに委ねられている第三天使の使命について自分のものにするまで真剣に学んでみようという決心しました。

M. N.

☞ 「古代イスラエルと現代イスラエル」の記事は、引用文の出所を明白にして系統立てて編集して下さったのは、良かったと思います。……編集内容が重要な主題についてであることを明白にして下さっていますのは、本当に嬉しいことで、主の印が押される働きであると信じます。どうか、1～15に及ぶ重要なテーマがみ霊の愛と知恵によって述べ続けられ、わが国の残りの民を主に会う備えを全うさせる真理の泉として時のある限り用いられますように。

Y. M.

☞ これで良いのかと思いつけております私に必要な警告を与えて下さいましたことを心から感謝致します。

A. K.

*Thank-you for your
response!
Sincerely,
Anchor*

広告

聖所の図解

多色刷り・・・・・・・・・・2,800円
一色刷り・・・・・・・・・・750円
図解の説明・・・・・・・・・・500円
テープ(作成中)・・・・・・・・1,000円

仰いで生きよ!・・・・・・・・・・100円

ダニエルと黙示録・・・・・・・・・・350円

開かれた門・・・・・・・・・・480円

キリストの再臨に備える・・・・・・・・・・60円

「生きて主を迎える事と死んで主を迎える事の違い」

サタンのわな・・・・・・・・・・近日出版予定
(大争闘の原本 Spiritual Gift にあったが現代版大争闘にはない。牧師の勧告にはある。ターゲットSDAに対するサタンの戦略、会議を知れ)

バチカンの世界支配・・・・・・・・・・近日出版予定
(フリーメイソン、ロックフェラー帝国、共産主義、アメリカ等の世界支配陰謀が人心を乱している中で預言の霊の明らかな解決を見る。バチカンの和平工作はどこまで来ているか)

何故ユダヤ人はメシアを拒んだのか? F. C. ギルバート著・・・・近日出版予定
(ユダヤ人からSDAに改宗した学者ギルバートが1930年頃、わが教会の教育制度をゆがめる認可問題に心を痛めて書いた記事)

モーセと小羊の歌 デビッド・ミラー著・・・・・・・・・・近日出版予定
(聖所の清め、キリストの性質、信仰による義認等の現代の真理をわかりやすく説明している)

ソ連で起きた大地震が今の世の中、そして我々教会を象徴しているような気がします。この揺れ動く中であっておろすべき錨を持っている者たちは幸いだと思えます。

今年は1888年～1898年、百周年を記念してアメリカではあちらこちらでそれを祝う記念行事が行われたようです。又、各国の教会誌にもそのことが取り上げられたようです。我々は祝うのではなく、悔い改めの機会とすべきだと信じています。アンカー2号で、「完全な品性はいかに？」ということを取り扱うということを書きましたが、今回は1888年の重要な問題に切り替えました。この問題は、もっと深く研究すべきものなので、記事やパンフレットにしていきたいと考えています。このアンカーが皆様の研究のお役に立てばと願っております。

どんな錨を、そしてどこにおろすべきかを本誌を通してお互いに学び合っていきましょう。

尚、これまでアンカーが郵送されてきた方々で、これ以上送られることをお望みにならない方は、お手数ですが、係りまでお知らせください。

〒住所 〒905-04

沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471番地

サンライズ ミニストリー内 アンカー係り

☎ 098056-2783

(098945-1549 わかば弁当内)

編集人：知念 かおり

発行人：知名 捷句

訂正：アンカー2号 32頁、TV告白を「広告」に訂正します。

※ 創刊号と2号がまだありますので、配布にご利用の方はご連絡下さい。

☎ この出版物は信徒によるもので皆様の祈りと自由献金によって続けられます。

